

第281図 P109～P113位置図

土師器 甕の口縁部片と体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。口縁部片は甕Eに分類されるもので、体部片は内外面ともハケにより仕上げられている。比較的大型の甕である。

須恵器 椀が1個体(453)出土している。椀Daに分類され、回転系切りにより切り離されている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P111(図版16 附表42)

検出状況 南地区南東部に位置する(第262図)。P112の南側に位置する(第281図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕の口縁部の小片(454)が出土している。甕Ecに分類され、内外面とも横ナデにより仕上げられている。

須恵器 杯の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。薄手に仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P112(図版16 附表42)

検出状況 南地区南東部に位置する(第262図)。P111の北側に位置する(第281図)。

出土遺物 土師器の甕と把手が出土している。

把手は小片のため図化できなかった。甕は455と456の2個体出土している。2個体とも口縁部を中心に残存するもので、甕Ecに分類される。455は、体部外面が縦方向のハケ、内面が体部が横方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。456も455と基本的に同様の仕上げであるが、口縁部内面のハケは認められない。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P113(図版16・74 写真図版80・185 附表42・100)

検出状況 南地区南東部に位置する(第262図)。P111の南東側に位置する(第281図)。

出土遺物 土器と石製品が出土している。

土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 杯が1個体(457)出土している。杯i3に分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

石製品 砥石(S7)が出土している。自然石を利用したもので、全面に砥ぎ痕が認められる。また側面には、刃先を砥いだ痕が認められる。

時期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P114(図版16 附表42)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P117の北西側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器の椀(458)が出土している。底部から体部にかけて残存し、椀Bbに分類される。須恵器椀の写しと考えられる。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土遺物から南構IX-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第282図 P114~P128位置図

P115(図版16 写真図版80 附表42)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P116の北西側に位置する(第282図)。柱穴の東肩部付近で、須恵器の蓋が口縁部の一部を欠いた状態で出土している(第283図・第284図)。柱穴を確認したレベルでの出土で、底部より10cm 高いレベルである。おそらく完形の状態で置かれていたものと考えられる。

出土遺物 須恵器の蓋(459)が出土している。つまみを伴わない蓋で杯B蓋Bに分類される。内外面とも回転ナデを基調とし、天井部外面は回転ヘラ切り後弱いナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅴ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第283図 459出土状況



第284図 P115

P116(図版16 附表42)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P115の南東側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 高杯の杯部(460)が出土している。無蓋高杯の杯部で、無蓋高杯Bに分類される。口縁部と体部の境外面には1条の沈線が認められる。沈線より下側は回転ヘラナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅴ期に位置付けられる(第6章第2節)。

P117(図版16 附表42)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P118の北西側に位置する(第282図)。

出土遺物 須恵器の杯蓋(461)が出土している。杯蓋pに分類され、天井部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。外面に窯壁の釉着が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P118(図版16 写真図版76 附表42・98)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P117の南東側に位置する(第282図)。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土器 土師器・須恵器が出土している。土師器と須恵器については、いずれも小片のため図化できなかった。土師器は杯Aの底部片が出土しており、ヘラにより切り離されている。須恵器は小片のため器種の特定も困難である。

土製品 土錘が1点(462)出土している。ほぼ完存する管状土錘で、全体がナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ～Ⅷ期に位置付けられる(第6章第2節)。

P119(図版16 附表42)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P120の南西側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器の甕が2点出土している。1点(463)は比較的大型の甕である。口縁部は如意形をなし、甕Ibに分類される。外面は、体部が斜方向、口縁部が縦方向のハケにより仕上げられている。内面は、体部がハケの後横方向のヘラ削りにより仕上げられている。最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。口縁部から体部にかけての内面には、煤の付着が認められる。

他に甕の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。大型の製品で、内面は横方向のハケにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P120(図版16 附表42)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P119の北東側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器の甕(464)が出土している。口縁部を中心に残存し、「く」字形をなし甕Ecに分類される。摩滅傾向にあるが、体部内面は横方向のヘラ削り、口縁部外面は横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P121(図版16・17 写真図版81 附表42・43・98)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P122の西側に隣接する(第282図)。なお遺構については柱穴として報告するが、後述する土錘の出土状況から判断して、土壌であった可能性が高いものと考えられる。

出土遺物 土器と土製品が出土している。

土器 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕が出土している。図化できたのは466の1点である。口縁部を中心に残存し、甕Ecに分類される。外面は縦ハケ、内面は横ハケの後内外面とも横ナデにより仕上げられている。わずかに残存する体部内面は、横方向のヘラ削りが施されている。他に甕の体部片が出土している。外面は横ナデ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 465の高杯1個体が出土している。長脚高杯の杯部と考えられ、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。無蓋高杯Eもしくは同Gと考えられる。焼成の特徴から陶邑産と考えられる。

土製品 土錘18点(467～484)がまとめて出土している(第9表)。もとは網に装着された状態であったものと考えられる。全て同タイプに分類され、多くが完存もしくはそれに近い状態で出土している。た

第9表 P121出土土師一覽表

No.	残存状況	長さ (cm)	最大径 (cm)	孔径 (mm)	色 調	胎 土	調 整
467	ほぼ完存	7.80	2.90×3.00	8.0	灰黄～黄灰	ほぼ精良	手づくね
468	3/4	7.40	2.50×2.60	9.0	灰	1mm以下の砂粒わずかに含む	手づくね
469	4/5	(6.70)	2.35×2.45	8.0	橙	1mm以下の砂粒やや多く含む	手づくね
470	ほぼ完存	6.50	2.15×2.45	7.5	にぶい黄橙	1mm以下のクサリ礫わずかに含む	手づくね
471	完存	6.40	2.60×2.75	8.0	橙	1mm以下のクサリ礫他やや多く含む	手づくね
472	2/3	(6.35)	2.20×2.40	8.0	橙	2mm以下のクサリ礫やや多く含む	手づくね
473	4/5	(6.30)	2.70×2.80	8.0	橙	2mmの砂粒やや多く含む	手づくね
474	3/4	(6.85)	2.50×2.60	8.5	橙	1mm以下の石英やや多く含む	手づくね
475	3/4	(6.60)	2.25×2.25	8～9	にぶい橙	1mm以下の砂粒やや多く含む	手づくね
476	ほぼ完存	6.20	2.50×2.30	8.0	にぶい黄橙	ほぼ精良	手づくね
477	2/3～3/4	(5.30)	3.00×2.90	10.0	灰黄褐～褐灰	1mm以下のクサリ礫他わずかに含む	手づくね
478	ほぼ完存	5.45	2.90×3.00	9.5	にぶい黄橙	2mm以下の石英やや多く含む	手づくね
479	2/3	(5.60)	2.60×2.80	8.0	橙	2mm以下のクサリ礫多く含む	手づくね
480	完存	5.60	2.30×2.60	5.0	にぶい黄橙	ほぼ精良	手づくね
481	完存	4.80	2.40×2.50	5.0	にぶい黄橙	1mm以下の石英わずかに含む	手づくね
482	完存	5.10	2.05×2.25	7.0	明赤褐	2mm以下の石英他多く含む	手づくね
483	1/2	(3.70)	2.15×2.10	8.0	にぶい赤褐	2mm以下のチャート他多く含む	手づくね
484	1/3	(2.70)	2.40×2.40	10.0	黄灰	精良	手づくね

だし大きさには差が認められ、最大長は7.80cm(467)、最小は5.10cm(482)である。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P122(図版17 写真図版80 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P121の東側に隣接する(第282図)。

出土遺物 土師器の高坏が1点(485)出土している。坏部が碗形をなすタイプで、高坏Ccに分類される。坏底部外面を縦方向のナデおよび指オサエ後、内外面が横ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P123(図版17 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P124の南西側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器の托が1点(486)出土している。底部を中心に残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。全体的に胎土が砂質である。

時 期 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P124(図版17 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P121・P122の南側、P123の北東側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器の高坏が1点(487)出土している。高坏Daに分類され、坏底部整形後坏部上半が継ぎ足されている(第285図)。このため、継ぎ足し部外面には段差が認められる。坏底部外面を指オサエ後横方向のナデを行い、その後内外面とも横ナデにより仕上げられている。最後に坏部内面に放射状の暗文が施されている。暗文は、ヘラナデ後斜方向に上下に往復させているが、全体的にやや雑である。



第285図 487 坏部接合痕

時期 出土遺物から南構IV期に位置付けられる(第6章第2節)。

P125(図版17 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P124の南東側、P126の北西側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器の碗(488)・杯A・甕が出土している。488は体部から口縁部にかけて残存し、口縁部はわずかに外反傾向にある。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

杯Aと甕については、小片のため図化できなかった。杯Aは、底部片が出土しており、ヘラにより切り離されている。甕は、甕Gdに分類される口縁部片が出土している。外面に煤の付着が認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅴ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P126(図版17 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P125の南東側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕が1点(489)出土している。口縁部が残存し、甕Ecに分類される。内面は、横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。外面については摩滅のため観察できない。また、わずかに残存する体部内面は、横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 高杯の杯底部付近が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P127(図版17 附表43)

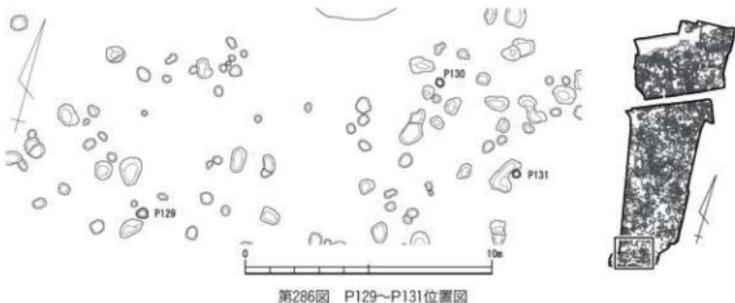
検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P128の北西側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 托(490)と甕が出土している。490は底部のみ残存し、回転糸切りにより切り離されている。外面は回転ナデにより仕上げられているが、内面は摩滅のため観察できない。甕は体部の小片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケにより仕上げられている。

須恵器 碗の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



P128(図版17 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P127の南東側に位置する(第282図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。土師器は甕が出土しているが、小片のため図化できなかった。体部片が出土しており、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。丸胴タイプで、器壁が薄く仕上げられている。

須恵器は杯(491)が出土している。口縁部を中心に残存する。

時期 出土遺物から南構Ⅵ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P129(図版17 写真図版80 附表43)

検出状況 南地区南西部に位置する(第262図)。P130の南西側に位置する(第286図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯Aが出土しているが、小片のため図化できなかった。口縁部から体部にかけて残存し、外面に赤彩が認められる。

須恵器 杯Aが1個体(492)出土している。杯Aeに分類され、底部は回転ヘラ切り後回転ナデにより仕上げられている。底部と体部の境界面には回転ヘラナデが加えられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P130(図版17 写真図版80 附表43)

検出状況 南地区南部中央に位置する(第262図)。P131の北西側に位置する(第286図)。

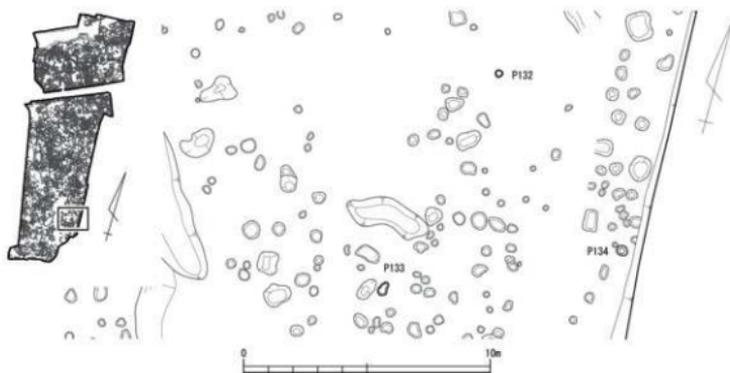
出土遺物 弥生土器が1個体(493)出土している。直口壺aに分類されるもので、緩やかな肩部に対して口縁部がわずかに外反気味に直立している。外面は体部から口縁部にかけて縦方向のハケ、体部内面は横方向のヘラ削り、口縁部内面は横方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。口縁部には径6.5mmの粗孔が1穴認められる。

時期 出土遺物から南構Ⅱ期に位置付けられる(第6章第2節)。

P131(図版17 附表43)

検出状況 南地区南部中央に位置する(第262図)。P130の南東側に位置する(第286図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。



第287図 P132～P134位置図

土師器 甕の肩部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はナデにより仕上げられている。

須恵器 杯Bが1点(494)出土している。底部は回転ナデの後、高台が貼り付けられている。内面には重ね焼き痕が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P132(図版17 附表43)

検出状況 南地区南東部に位置する(第262図)。P134の北西側に位置する(第287図)。

出土遺物 土師器と黒色土器が出土している。

土師器 杯の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。薄手につくられている。

黒色土器 杯が1個体(495)出土している。口縁部を中心に残存し、内面のみが黒化している(A類)。外面は、体部がナデ、口縁部が横ナデ、内面は体部が横方向のヘラミガキにより仕上げられている。内面のヘラミガキは単位が細く、上から下方向の順に施されている。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P133(図版17 附表43)

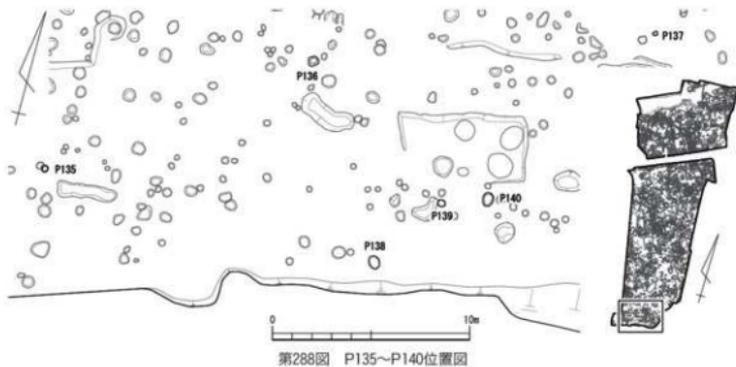
検出状況 南地区南東部に位置する(第262図)。P134の南西側に位置する(第287図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 鉢・杯・甕が出土しているが、鉢と杯については小片のため図化できなかった。杯は体部の小片が出土している。赤色化している。甕は496の1点出土している。甕Gaに分類され、口縁部が大きく外反している。外面は縦方向のハケ、内面は横方向のヘラ割り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

須恵器 杯が出土しているが小片のため図化できなかった。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第288図 P135～P140位置図

P134(図版17 附表43)

検出状況 南地区南東隅に位置する(第262図)。P132の南東側、P133の北東側に位置する(第287図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯と甕が出土しているが、杯については小片のため図化できなかった。口縁部を中心に残存し、薄く仕上げられている。甕は497の1点で、甕Eaに分類される。口縁部を中心に残存し、体部に対して器壁が厚く仕上げられている。体部外面は縦方向のハケ、体部内面は横方向のヘラ削り、口縁部内面は横方向のハケにより仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。この他小片のため図化できなかったが、甕Icに分類される口縁部片が出土している。

須恵器 杯もしくは杯蓋と考えられる体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から南構Ⅴ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

P135(図版17 附表43)

検出状況 南地区南東隅に位置する(第262図)。P136の南西側に位置する(第288図)。

出土遺物 須恵器が1個体(498)出土している。無蓋高杯Ihの杯部と考えられ、杯部のみが残存している。内面とも回転ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅴ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P136(図版17 附表43)

検出状況 南地区南端部に位置する(第262図)。P139の北西側に位置する(第288図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 椀が2個体(499・500)出土している。499は底部のみの残存で、椀Cに分類される。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。500は椀Cbに分類され、499より明確な平底形態をなす。内外面とも摩滅のため調整は観察できないが、回転ナデの可能性が高い。底部の残存はわずかであるが、回転糸切りによる切り離しと考えられる。

須恵器 甕の体部片と皿の口縁部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から南構Ⅴ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P137(図版17 附表43)

検出状況 南地区南端部に位置する(第262図)。P140の北東側に位置する(第288図)。

出土遺物 甕Aaに分類される土師器の口縁部片(501)が出土している。内外面とも摩滅のため調整は観察できないが、横ナデと考えられる。

時期 出土遺物から南構Ⅲ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P138(図版17 附表43)

検出状況 南地区南端部に位置する(第262図)。P139の南西側に位置する(第288図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕が出土している。図化できたのは502の1個体で、甕Eに分類される。内面を横ハケの後、内外面が横ナデにより仕上げられている。他に図化できなかったが、甕の体部片が出土している。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。

須恵器 無蓋高杯の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から南構Ⅵ期に位置付けられる(第6章第2節)。

P139(図版17 附表43)

検出状況 南地区南端部に位置する(第262図)。P140の南西側に位置する(第288図)。

出土遺物 土師器の甕が1点(503)出土している。甕Feに分類される。外面は体部が縦方向のハケ、内面は体部がヘラ削り後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅶ期に位置付けられる(第6章第2節)。

P140(図版17 附表43)

検出状況 南地区南端部に位置する(第262図)。P139の北東側に位置する(第288図)。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 鍋・高坏・杯・甕の各器種が出土しているが、図化できたのは504の鍋に限られる。口縁部がわずかに残存し、鍋Aaに分類される。内外面とも横方向を主体としたハケにより仕上げられている。最後に、端部が横ナデにより仕上げられている。杯はわずかに外反傾向にある口縁部片が出土している。

高坏は脚柱部が出土している。甕は、甕Eaに分類される口縁部片と、体部片が出土している。体部片は、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 壺の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

P141(図版17 附表43)

検出状況 南地区北部中央に位置する(第262図)。P072の南西側に位置する(第269図)。

出土遺物 土師器の杯Aと甕が出土しているが、図化できたのは505の甕Aに限られる。甕Adに分類される。底部は回転ヘラ切りにより切り離され、外面は回転ナデにより仕上げられている。内面は摩滅のため調整は観察できない。他の甕は、甕Gaに分類される口縁部片が出土している。大型の甕である。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



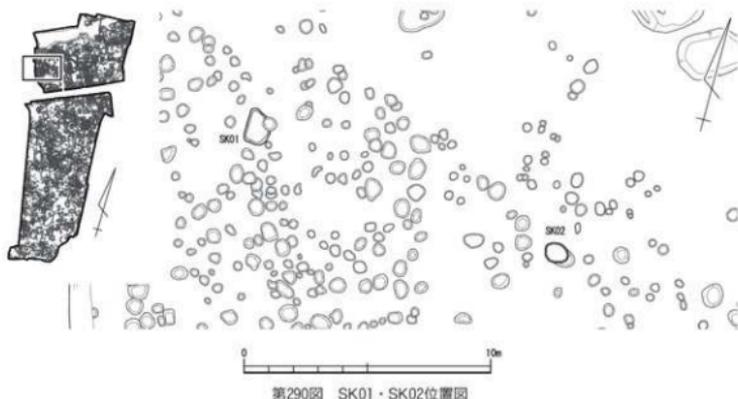
第289図 土壌位置図

第5節 土 壙

1. 概 要

土壙については数多く検出されている。土壙のなかには柱穴との区別が困難なものが認められ、調査時には土壙として調査したものが、その後掘立柱建物を構成する柱穴であることが明らかとなったものも少なからず認められる。このため、土壙の正確な数を明らかにすることは困難である。おそらく100基前後になるものと考えられる。その分布に偏りは認められず、調査地の北側から南側にかけて検出されている。時期についても古墳時代から中世にかけて、各時期にわたるものと考えられる。

本書では、遺物が良好な状態で出土した計47基(SK01～SK47)について報告する(第289図)。



第290図 SK01・SK02位置図

2. 土 壙

SK01(図版18・70 写真図版44・80・180 附表43・102)

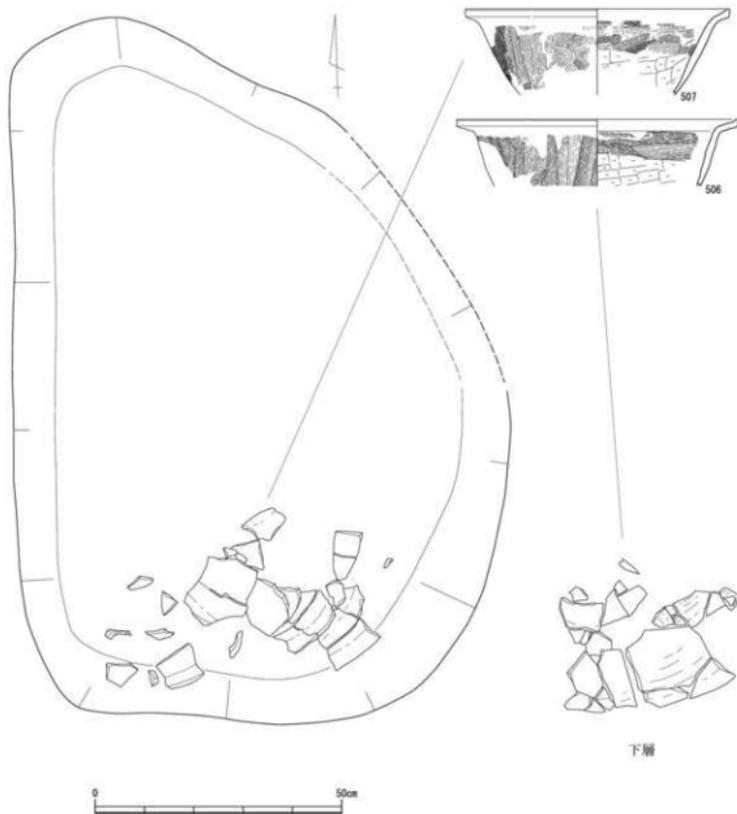
検出状況 北地区北西部に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK02の北西側に位置する(第290図)。平面形は方形傾向にあり、その規模は主軸方向で1.42m、その直交方向で1.02mを測る(第291図)。土壙の南辺を中心に、その上面から土師器の鍋が出土している(第291図)。土器は大きく上層と下層に分かれて出土している。上層から507が、下層から506が出土している。その出土状況から、いずれも本来は形のある状態であったものが、その場で押しつぶされたものと考えられる。

出土遺物 土器と金属製品が出土している。

土 器 土師器の鍋2個体(506・507)が出土している。この2点についてはともに鍋Bに分類され、口縁部の特徴が異なる以外、他の特徴は同じである。口縁部は、506が水平方向に屈曲し、端部が上方へつまみあげられている。一方507は口縁部の屈曲が緩やかで、顕著なつまみ上げは認められない。2個体とも、体部から口縁部にかけての外面を縦方向のハケ、体部内面を横方向のハケの後下半を横方向のヘラ削りにより仕上げられている。最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

金属製品 鉄釘が1点(M35)出土している。M35は先端を欠き、残存長は5.55cmである。断面方形の和釘で、頭部は頭巻と考えられるが、残存状況は良好ではない。断面は6mm×7mmの方形である

時 期 出土遺物から南横Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第291図 SK01

SK02(図版18 写真図版45・81 附表43)

検出状況 北地区北西部に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK01の南東側に位置する(第290図)。平面形は楕円形をなし、主軸方向で1.00m、その直交方向で80cmを測る。他の遺構との切り合い関係は認められない。

出土遺物 須恵器の杯蓋1個体(508)が出土している。完存する個体で、杯蓋Y4に分類される。天井部はヘラ切り未調整である。

時期 出土遺物から南橋VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第292図 SK03～SK08位置図

SK03(図版18 附表43)

検出状況 北地区中央部に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK04の北西側に位置する(第292図)。平面形は長楕円形をなし、主軸方向で1.13m、その直交方向で65cmを測る。P021と切り合い関係にあり、P021を切っている。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 杯・甕・鍋が出土している。杯は509の1点が出土している。口縁部を中心に残存し、内外

面とも回転ナデにより仕上げられている。また、内外面に赤彩が認められる。

甕と鍋については、いずれも小片のため図化できなかった。甕は体部片が出土しており、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。外面には煤の付着が認められる。鍋も体部片が出土している。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

須恵器 甕の体部片が出土している。外面は叩き整形後カキ目が施されている。内面には当て具痕が認められる。全体的に焼成が不良である。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK04(図版18 附表43)

検出状況 北地区中央部に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK03の南東側に位置する(第292図)。平面形は隅丸方形をなし、その規模は1.02m×1.00mを測る。

出土遺物 土器と金属製品が出土している。

土器 須恵器の杯・杯B蓋・壺・甕が出土している。図化できたのは杯B蓋と杯に限られ、壺と甕については図化できなかった。杯B蓋は510の1個体で、口径29.00cmと大型の蓋である。杯B蓋Abに分類され、天井部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。杯は511の1個体で、体部から口縁部にかけて残存する。

壺と甕についてはいずれも体部の小片が出土している。

金属製品 鉄製の折れ釘が1点出土している。両端を欠くものである。断面は6.5mm×6.5mmの方形をなし、残存長は3.60cmを測る。図化はできなかった。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK05(図版18 附表43)

検出状況 北地区中央部南側に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK06の北西側に位置する(第292図)。本遺構の南側が後世の攪乱を受けており、全体の形状等は不明である。隅丸方形もしくは隅丸長方形をなしていたものと考えられる。主軸方向で1.02m残存し、その直交方向で1.03mを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕Ealに分類される口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器 壺と甕が出土しているが、甕については図化できなかった。外面は叩き整形により仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。壺は512の1点が出土している。壺Gの一部と考えられる。底部から体部にかけて残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。体部外面は火ぶくれにより、その形状が大きく歪んでいる。

時期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK06(図版18 附表44)

検出状況 北地区中央部南側に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK05の南東側に位置する(第292図)。本遺構の西側が後世の攪乱を受けており、全体の形状等は不明である。隅丸方形もしくは隅丸長方形をなしていたものと考えられる。主軸方向で1.25m残存し、その直交方向で

1.17mを測る。

出土遺物 土師器の杯A・椀・甕が出土している。椀は513の1個体である。513は体部から口縁部にかけて残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯Aは514の1個体で、杯Afに分類される。底部から体部にかけて残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

甕については口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。口縁部片は甕Eaに分類されるもので、内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部片は、外面が縦方向のハケ、内面が横方向のヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ-2期に位置付けられる。

SK07(図版18 附表44)

検出状況 北地区中央部南端に位置する(第289図)。第5次調査で検出された遺構である。SK08の南西側に位置する(第292図)。P035と切り合い関係にあり、本土壌の南東隅がP035に切られている。

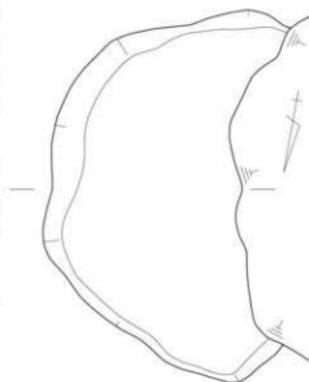
平面形は楕円形をなし、その規模は主軸方向で1.05m、その直交方向で78cmを測る。黒褐色シルト～極細砂が堆積していた。層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 甕が出土している。図化できたのは516の1個体である。甕Eaに分類され、口縁部を中心に残存する。口縁部は「く」字形をなし、内外面とも横ナデにより仕上げられている。体部がわずかに残存し、内面はヘラ削りにより仕上げられている。他に、小片のため図化できなかったが、甕Gdに分類される口縁部片が出土している。

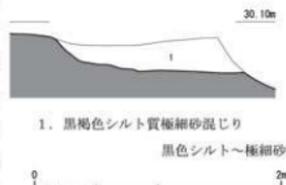
須恵器 515の壺Gが出土している。底部から体部にかけて残存し、底部は回転糸切りにより切り離されている。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内面の稜がシャープである。

時 期 出土遺物から南構Ⅶ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



SK08(図版18 写真図版81 附表44)

検出状況 北地区中央部南端に位置する(第289図)。第5次調査で検出された遺構である。SK07の北東側に位置する。平面形は円形に近い形態と考えられるが、西半部が攪乱を受けている(第293図)。このため検出できたのは全体の約1/2にとどまる。他の遺構との切り合い関係は認められない。主軸方向で3.00mを測り、その直交方向で1.60m残存する。横断面は皿状をなし、最深部における検出面からの深さは30cmである。埋土は黒褐色シルト質極細砂混じり



第293図 SK08

り黒色シルト～極細砂1層が堆積していた。その層相から判断して人為的に埋められたものと考えられる。

出土遺物 土師器・須恵器・灰軸陶器が出土している。

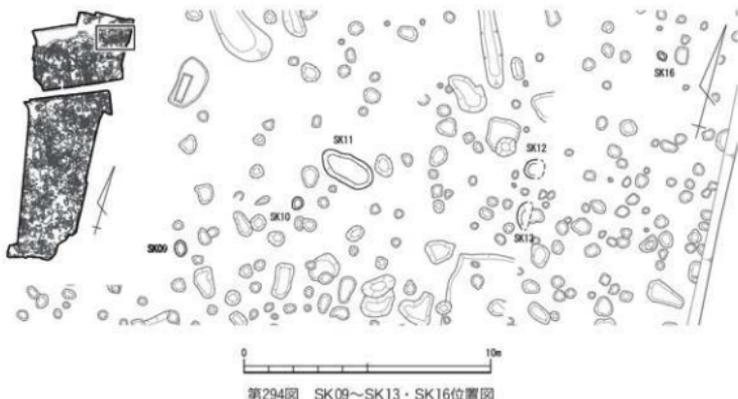
土師器 高坏と甕が出土している。高坏は坏部が残存するが、小片のため図化できなかった。内面には放射状の暗文が認められ、外面は強いヘラナデにより仕上げられている。

甕で図化できたのは517の1個体に限られる。甕Eaに分類され、体部上半から口縁部にかけて残存し、口縁部は「く」字形をなしている。体部内面は斜方向のヘラ削り、口縁部は横ナデにより仕上げられている。外面については摩滅のため調整は観察できなかった。このほか、図化できなかったが、体部の小片が出土している。内面はヘラ削り、外面はナデにより仕上げられている。

須恵器 甗と壺が出土している。甗は518の1個体が出土している。ほぼ完存する個体で、甗Adに分類される。口縁部は緩やかに外反傾向にある。底部は回転ヘラ切り後ナデが加えられている。壺は520の1個体である。甗Mと考えられ、底部から体部中位まで残存する。外面は、体部下半が回転ヘラ削りにより、上半が回転ナデにより仕上げられている。内面は底部から体部にかけて回転ナデにより仕上げられている。底部は静止ヘラ削りにより仕上げられている。

灰軸陶器 壺の頸部片(519)が出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、頸部内面は指オサエが加えられている。内面全面と外面の一部に軸の付着が認められる。

時 期 出土遺物から南構Ⅵ-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第294図 SK09～SK13・SK16位置図

SK09 (図版18 写真図版46・82 附表44)

検出状況 北地区北東部に位置する(第289図)。第4次調査で検出された遺構である。SK10の南西側に位置する(第294図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、主軸方向で68cm、その直交方向で49cmを測る。横断面は皿状をなし、最深部における検出面からの深さは8.50cmである。



第295図 SK09の検出